

# Edgar Allan Poe

## *Romance* をめぐって

重 松 卓 未

### (1)

Poe は *Al Aaraaf, Tamerlane, and Minor Poems* という 1829年、即ち彼が20才の時に出版した詩の序に *Romance* という詩をあげている。それは「アル・アーラーフ」という長い詩とくらべると極めて小さな2連21行からなる詩である。

後年 *The Philosophy of Composition* の中で彼がのべているような、すべてを計算し、すべてを単一の効果に持って行く短かい詩という定義はまだこの段階ではあてはまらないが、この詩の中には何かしら *The Fall of the House of Usher* を予告し、その小説の中に含まれている *The Haunted Palace* につながって行く芽ばえを持っているようである。

*Romance* は極めて短かい詩であり、*Al Aaraaf* は非常に長い詩である。共に若い時の作品でありながら、この二つの詩が私達に伝達するものは、まったく逆である。

### (2)

Romance, who loves to nod and sing,  
 With drowsy head and folded wing,  
 Among the green leaves as they shake  
 Far down within some shadowy lake,  
 To me a painted paroquet  
 Hath been—a most familiar bird—

Taught me my alphabet to say—  
 To lisp my very earliest word  
 While in the wild wood I did lie,  
 A child—with a most knowing eye. (*Romance* 1 st.)

幸福でありそして同時に不幸であるという事は世の常であろうし、文学を専攻する者の多くの人にその矛盾はあろう。Poe の人生にもまた彼が得意になって語る文学論の中にもそれは決定的要素となっている。

ゆたかな幸福があつという間に不幸に転じて行く。その初めはアラン家と彼との関係である。アラン氏には Poe を養子としあとをつがせる意志なぞまったくなかったと考えてもいいだろう。ただ夫人が哀れな女優の子供を引取って育てたと主張した時、彼は子供のない妻の頑固さに負けた。アラン氏にはその子にあとめをつがせる意志はなかったし、不幸な事に Mrs. Allan も彼を、つきつめれば、子供としてではなく犬や猫を可愛がるような気まぐれで彼を引取ったのである。

けれどもアラン夫人が生きているうちはよかった。やがて夫人が死に Poe は養家をとび出して行く。流転の生活の中にあつて Poe は Allan 家の生活をなつかしく思い出すのであつた。

*Romance* という詩の中には、すぎ去つた過去の楽しかった日々、それには初恋の人の姿も含まれる、彼からの手紙をとりあげられた初恋の人 Mrs. Shelton の姿、*To Helen* の中にえがかれたと云われる友人の母の姿等も含まれている。そして *painted paroquet* は恐らく彼が見たある飾りであろう。そしてそれは幸福な彼の幼年時代を象徴するものであろう。<sup>1)</sup>彼の幼なかった目の奥深くこびりついた印象であろう。それは Poe が幼少時代に見た *painted target* から発想したものかも知れぬがその *image* が更に生きた *parquet* と重なり合つて行く。*The Black Cat* の始めの部分で読者に紹介される犬や猫を愛し、小鳥をかわいがる無心な少年の姿である。それは彼の

1) Cf. T. O. Mabbott : *The Selected Poetry and Prose of Edgar A. Poe* (The Modern Library 1951) p.407 (作品としては1831年版をとりあげ長詩としている)

幸福であった少年時代の象徴である。

「私にアルファベットを教えてくれ  
初めて言葉を教えてくれた・・・」

その *parquet* を彼は幸福のシンボルとして思い出している。

### (3)

*Al Aaraaf* は若き日の Poe がその詩才のすべてをかたむけた力作長篇である。けれどもそれは多感な青年の創作活動がその時点において始まったという事以外には何ら注目すべき作品ではなからう。Quinn の批評に引用してあるようにその作品の詩的価値を認める人はほとんど無いと云っても過言ではない。<sup>1)</sup> *Al Aaraaf* で Poe は壮大なる天国をえがき、科学を否定し、果しなくひろがる詩の領域を確立しようとした。そしてそれはその難解さ、その唐突さの故に失敗してしまった。彼の考えた「天国」には誰もついて行けなかった。若き日の夢を追う Poe の代表的な失敗作である。

然しこの失敗はむしろ彼にプラスしたと考えられる。即ち、彼は若くして自己自身の作品の限界に気づき、後に彼の特異な文学観を構成するのに多大の貢献を与えた。

*Romance* という短かい詩は第1連と第2連の間に越すことの出来ない深い不連続を持っているようだ。その第一連から出発し、第二連の *Condor* にシンボライズされる苦しみとの絶えざる争の中に、彼独自の誰にもまねの出来ない *Poe's World* の建設が始まったと考えられる。

若き多感な詩人は自己の詩才の奔流に身をまかせる事の愚かさを悟り、その流路の方向づけに苦悩する。

*Al Aaraaf* を離れ、*Romance* の第1連から去り、やがては第2連の苦しみからも去って行った時初めて Poe は彼独自の作風を決定し、すぐれた作品を発表する事が出来た。

1) Cf. A. H. Quinn : *Poe A Critical Biography* (New York, 1941) pp. 152~154, 443

そういう観点において私達はこの二つの詩をもっと検討すべきだと思う。が前者においては荒唐無稽のそしりをまめがれぬし、その後においてわずかに *Eureka* (1848) にしかその影響をみとめえない。

しかし *Romance* は違う。この長篇の詩 *Al Aaraaf* を否定し、同時に新しい Poe 的文学を示唆している。

「アル・アーラフ」の失敗が Poe に自からの文学観を反省させた。そして同時に Poe に自己の文学のあまさを痛感させた。然りアメリカの地方文学などはまださかえる確乎たる ground を持っていなかった。まだ New England を中心とする文学活動には多少世間の眼はむけられていたが Virginia, これは奇しくも彼の妻の名前でもあるが、などの一文学青年の作品をとりあげる方がおかしい。

Poe はかくていやおうなく *Romance* の第1連の甘さを去り第2連のきびしき Condor という現実に向う。

この時もし仮に彼に他の収入があり彼が幸福であったならば、恐らく彼はここで挫折し彼のペンを折ったであろう。だが彼は自分のしいたレールにそって直進する外はなかった。伯母の Mrs. Clemm の所に住み、その娘である Virginia と結婚する彼の人生は、文学的情熱とはまた違ったどうにもしようがない人生の悲哀をおぼえさせる。

*Romance* の第1, 第2連——それは相矛盾するものであっても Poe の心の奥深くあったものである。彼はその矛盾する二つの要素をまえより高い物に創作しようとして失敗した。そして彼は自己の世界を創りあげるのである。即ち「アル・アーラフ」の世界をより限定し、とぎすましたものへと変貌させる。それが彼自身の成長であり詩的能力への発展とつながる。彼の文学の世界には限度がある。即ち彼の才能は一定の限界があった。

*Romance* は1829年の詩集にのせられただけでなく、彼の詩の決定版ともいうべき1845年の詩集に載っている。例によって彼は微妙な点に幾度も手を加えているが、第1連には殆んどめだつた変化はなく第2連において Poe は幾度も手を加えている。その点から考え合せても Poe は第1連を今ふりか

えって見れば楽しかった少年時代の思い出とし、第2連は彼がこれから直面する彼自身の独特な詩の世界とつながっているものとみなしている事は間違はあるまい。尚この詩は多くの雑誌に載せられ、彼の詩の中でも特にすぐれたものであると評されている。

第2連に加えられた主とした変化は次のようなものである。<sup>1)</sup>

## line

11. Of late, eternal → 1831 : O. then the eternal
12. So shake the very Heaven on high → 1831 : So shook the very heavens on high
13. With tumult as they thunderd by → 1831 : With tumult as they thunder'd by;
14. I have no...cares → 1831 : I had no...cares,  
SM<sup>2)</sup>: I scarcely have had time for cares
15. Through...the...sky. → 1831: Thro'...sky!
16. And when...wings → 1831 : Or if...wing
17. 1831 : Its down did on my spirit fing,
18. time with...rhyme → 1831 : hour with...rhyme
19. away- forbidden things ! → 1831 : away-forbidden thing !  
SM : away (forbidden things !)
20. would feel crime → 1831 : half fear'd...crime

わづか10行の詩のすべての line に、このような多くの変化が加えられている。

それは異常なまでの彼の執念であり、彼自身がその詩について多くを語らず、然も一説によればその詩を読まれる度に嫌な顔をしたという点から考え合せると、この詩の持つ意義が極めて重大であるともいえよう。1831年の詩集には更に45行に及ぶ2連を附加して出版したが1845年の詩集でははぶいて

1) Floyd Stovall : *The Poems of Edgar Allan Poe* (Virginia 1965) pp. 204~205

2) "The Saturday Museum," a weekly, Philadelphia. の略

しまっている。<sup>1)</sup> 除去された部分は次のようである。

Succeeding years, too wild for song,  
Then roll'd like tropic storms along,  
.  
.  
.  
That very blackness yet doth bring  
Light on the lightning's silver wing.

For, being an idle boy lang syne,  
Who read Anacreon, and drank wine,

.  
.  
.  
His pleasure always turn'd pain—  
His naivete to wild desire——  
His wit to love—his wine to fire—  
And so, being young and dipt in folly  
I fell in love with melancholy,  
And used to throw my earthly rest  
And quiet all away in jest—

この部分は確かにあまりにも悲哀にみち、その詩としての価値に乏しい。Poe が後にこの部分をけづり取ってしまった理由もうなづける。しかしこの除去された部分が *Romance* を初めて作った時の彼と、後になって何かそれに説明を附加せざるを得ない気持になっていた彼との差を一換言すれば彼の成長を一はっきりと示してくれる。この附加された部分はその詩的価値は別にして *Romance* を説明してくれる。ふり返った少年時代はそれ程甘美なものではなかった。第1連も所詮は第2連の序にしかすぎなかったと彼は云っている。1831年の彼の心境であった。だが1845年の詩集の中で彼はこの部分を取ってしまって、元の2連21行の作品をのせている。「若き時の詩」という考えに立って附加部分を除いたとも考えられるが、同時にその事は1845年のすでに円熟し、己の詩才をはっきりと自負した大詩人の心境を示してい

1) Op. cit., pp.203~204.

る。*Romance* は最初のままがよろしいと彼は考えた。後の45行は蛇足であると考えた。そしてこの表面的には相反する第1連と第2連が実はその分裂の中にそれぞれ独自の意義を持っていて、青年時代の自己を如実に表現していると考えたのであろう。

だが蛇足とも取られるこの詩の附加部分が *Romance* の本当の説明であり、彼の悲惨な人生を知る読者にいかなる伝記にも増して彼の苦悩を伝える。そういう意味では彼の詩を愛する者には欠くべからざる詩行である。

## (4)

*Romance* の第2連の中で Poe は次のように語っている。

Of late, eternal Condor years  
 So shake the very Heaven on high  
 With tumult as they thunder by,  
 I have no time for idle cares  
 Through gazing on the unquiet sky.  
 And when an hour with calmer wings  
 Its down upon my spirit flings—  
 That little time with lyre and rhyme  
 To while away—forbidden things!  
 My heart would feel to be a crime  
 Unless it trembled with the strings.      (*Romance* 2 st.)

「今、この年になれば永遠なるコンドルの年月に高き大空もその羽ばたきにふるえ……私の心はその弦のひびきに合せてふるえなければ、罪を感じる。」

コンドルの年月とは何を意味しているのか。この時期、即ち彼の若き日に創作した他の詩を見ると、後には除外されてしまった詩の *The Happiest Day*, *The Happiest Hour* の最終スタンザに次の如くのべてある。

For on its wings was dark alloy,  
 And as it flutter'd—fell  
 An essence—powerful to destroy  
 A soul that knew it well

この詩は1827年の作品であるが、他のスタンザはどう考えても詩という名前に値しないものであろう。しかし最終スタンザは興味深い。彼は「羽ばたく翼がすべてを打破る」と云っている。

「アル・アラーフ」を含む詩集の中には *Romance* 以外に短詩 *Sonnet—To Science* がある。この詩は後に *The Raven and Other Poems* に加えられている所を見れば前者の如く抹殺された作品と違って彼の作品の中でもすぐれている詩と考えられたのであろう。もっともこういう14行詩を作る能力もある、という意味でとり入れたのか、または詩集に変化を与えるという意味があったとも考えられないこともない。

Science! true daughter of Old Time thou art!  
 Who alterest all things with thy peering eyes.  
 Why preyest thou thus upon the poet's heart,  
 Vulture, whose wings are dull realities?

ここにもまた *vulture* (コンドル) がえがかれている。

即ち彼の青年時代に表現されたコンドルとは彼の幸福なる少年時代をうばってしまう非情なる現実を象徴している。

*Painted paroquet* にシンボライズされた幸福になる少年時代は、己を知り世を知って行く *Condor* でシンボライズされる現実に打ち負かされて行く。「コンドル」は彼の幸福なる人生を破壊して行く現実——冷めたい人の世のならいを象徴している。と同時に逆説的ではあるがそれがある故に詩人の名を高くした創作活動に *Poe* は没頭する事が出来たのである。

多感な青年時代を彼は去り、1831年の詩集発刊に向って彼はひたむきな努



力をする。“Southern Literary Messenger”の編集長としても、また鋭い評論家としても、そしてまた驚怖にみちた物語の作家としても彼の名声は知れわたった。

(5)

Poeはその本質において極めて *eccentric* な性格であったらしい。すべての詩を何度も何度もかえているし、驚くべき増加もしている。*Romance* においても1831年版では更にスタンザを増してみても、また1845年版ではそういうものをけづっている。

*Berenice* の中で彼はすっかり変貌し昔の美しかった彼女に発見出来なかった妖しい美—この場合は歯であるが—そこに彼独特の美を発見する。モノマニアックな狂人の発見する美である。それは単に彼の *fiction* の中にあらわされているだけではない、彼の本質なのである。詩の中に現れる物象すべてその結晶体である。彼の作品の中にはいろいろな形で「海」が出る。それと同じように「鳥」が出て来る。幸福を象徴する鳥、そして不吉を現わす鳥がある。その最たるものが彼の名作 *The Raven* であろう。この鳥の着想については *Romance* を含めた彼の青年時代の他の多くの作品と考え合せば、その詩は彼の若かりし日の作品の延長と考えるのが妥当であろう。

堂々として動かぬ *Raven* のまわりをめぐるいろいろな面からの質問にその鳥は“*Nevermore*”とのみしか答えぬ。そして彼の意図したクライマックスにだんだん近づき最終的には彼の世界の貴重なる存在となって行く。

彼の作品の中にあらわされる鳥は何時、何処でその *image* を得たのであろうか。多くの研究者はその問題にとり組んでいるが憶測の域を出ぬ。

飛ぶものは本質的に彼の世界に属さない。それは破壊を示し、不幸を表す。しづんで行く物、分解されていくものこそが彼の世界にふさわしい。

*Israfel* の中で彼がしめしたように、

Yes, Heaven is thine ; but this  
Is a world of sweets and sour ;

If I could dwell  
Where Israfel  
Hath dwelt . . .

(そうです、大空は貴方のものでしょう、がこの苦難にみちた世では…。)  
これこそが Poe の世界であり誰人も入る事を許されない peculiar な世界である。

ロマンスの第二連を去り、その第一連をそっと自己の胸にひめて、彼は彼自身の文学界の建設に出発したのである。

( 6 )

In the greenest of our valleys  
By good angels tenanted,  
Once a fair and stately palace—  
Radiant palace—reared its head.  
In the monarch Thought's dominion—  
It stood there !  
Never seraph spread a pinion  
Over fabric half so fair !                   (*The Haunted Palace* I st.)

彼はこの詩を 最初単独の 詩として発表した。即ち 1839 年に “Baltimore American Museum” の 4 月号にのせたのであるが、その次には *The Fall of the House of Usher* の中に取り入れられて同年の 9 月に他の雑誌に発表されている。

6 スタンザで構成されるこの詩は、「アッシャー家の崩潰」の構想以前に作られ、この詩がその小説をみちびき出す役目をしているようである。

もっとも彼がこの詩を作る段階にはすでに *The Fall of the House of Usher* が出来上っていたのかも知れない。

しかしそのいづれにしてもこのすぎ去った少年時代をそっとふりかえり、なつかしむ彼の気持は *Romance* の第1連と共通する所がある。James R. Lowrell に送った手紙の中で彼はこの *The Haunted Palace* は自分の傑作の一つであるといっているが、<sup>1)</sup> 後の彼の作品とくらべてみると、なる程彼の特異な詩の一つではあろうが、彼が自讃している程すぐれたものであるとは考えられない。

この *The Haunted Palace* と *The Fall of the House of Usher* の発表時期のづれが5カ月であるという事は問題として取りあげる必要は無いと思う。何故ならたとえ前者が詩であり、後者が小説であるにせよその発想、内容はまったく同一なのであるから。ただ詩の中では若く幸福で明るさにみちひたすらに知性の追求にあけくれた部分が4連あり、あとの2連が彼のうらぶれた人生の末路を示しているのに対し、小説はすでに人生に疲れきった彼の提示から始まるだけの差しか無い。

*Romance* の延長の上に *The Haunted Palace* の存在があると私は考えるが、ただ決定的な差は前者は詩人の魂のたくまざる吐露であるのに反して後者はすべての効果を計算した作品である事である。第4連で彼は次のようにのべている。

And all with pearl and ruby glowing  
 Was the fair palace door,  
 Through which came flowing, flowing, flowing,  
 And sparkling evermore,  
 A troop of Echoes, whose sweet duty  
 Was but to sing,  
 In voices of surpassing beauty,  
 The wit and wisdom of their king.      (*The Haunted Palace* 4 st.)

1) Cf. John Ward Ostrom(ed.) : *The Letters of Edgar Allan Poe* (New York 1966) pp. 256—257.

この第3行目から第5行目にかけての「永遠に流れひびき行くもの」こそが彼の詩の世界の完成を指示しているといっても過言ではあるまい。

1849年11月に“Sartain's Union Magazine”に発表された *The Bells*, 同じく1849年11月に“The Southern Literary Messenger”に発表された *Annabel Lee* (彼が死ぬ直前に作られ、彼の死後発表された作品——彼の作品としては最もすぐれたものと考えられるし、*The Raven* よりもすぐれているとも考えられている作品) の中に Poe が彼の詩の世界において遂に到達した究極の世界、即ちひびき渡る音の美、すべての論理をこえ、すべての雑念を忘れて存在する世界に行く過程を示している。

このたくまざる、あらけづりといおうか、自ら流れ出て来たものの結晶のような *Romance* と、究極の点に達する苦悩をたくみなテクニックを用いながら示している *The Haunted Palace* と完成されきった作品 *The Bells*, この3つの作品をむすんで考え合せると、そこに Poe の詩の世界の成長を私達は見るのではあるまいか。

## (7)

Poe が理想とし、貪欲なまでに追究したのは美の世界である。しかもそれは何かしら神秘につつまれた美の世界である。それは一つには彼の波乱に富みすぎた感のある人生それ自体にもその原因があるが、その土台の上になって彼が前人未踏の美の新らしいジャンルを発見した事に起因する。

彼が発見した新らしい世界は彼のみが感知する事が出来、彼のみがそこに入って美の神をあがめる事を許される世界であった。彼の創りあげた新らしいジャンルはフランスでその価値を認めなかったら、今日の如く広く世間に認められなかったであろう。

しかも今日なお多くの作家・研究者がその文学の世界の特異さにとまどっている。

彼は新らしい美のジャンルを発見したのである。この前人未踏の領域に彼

は彼独得の世界をつくりあげたのであるが、彼は新らしく発見した世界こそ真の美の世界であり、従ってすべての作家の美への追究はここに存在すべきであると考えた。即ちそれは極めて合理的な、すべての人の従うべき原理の上に構成されたものであると信じこんだ所に一つの矛盾が生じたのであった。

Poe の詩の美は究極において *The Bells* であると云っても過言ではない。*Annabel Lee* をもっと抽象化してしまった作品である。自然がもたらす美しさでもない。生のよろこびでもない。勿論、魂の苦悩から発する叫びでもない。それは死と静と音が織りなす妖しい美の世界である。換言すれば宝石のような冷たいきらめきと、胸をえぐるような大小の音の織り出す世界である。

あまざっぱいような *Romance* の第1連に別れをつけ、その第2連の苦悩を通り抜けて行ったコースがやがて *The Haunted Palace* へと繋がって行き *The Raven* を生み出し、そして幻想と音のみの世界 *Annabel Lee*, *The Bells* に到って彼の詩はそのクライマックスに達するのである。そして不幸な事に、彼の詩の世界はそこで究極に達したと見るべきであろう。響きわたる鐘の音は彼の発見した世界の限界を告げているようである。

*Romance* から *The Haunted Palace*, *The Raven* を経て彼は *The Bells* に達し、そこで疲れきった彼は、ふとその人生を終える。

*Romance* は余りにも小さな詩である。然しその中に私達は Poe の詩才のすべてを予言する暗い影を発見する。

Poe が幼なくして見た *parquet* は彼の心に何をささやき、何を予告したのであろうか。